

# 山間地農林業複合経営の強靱性 変わらないと残れない

焼畑が残る山奥の秘境にありながら、人口減少率が小さい。循環型の複合経営が農家経営を安定させ、一方、神楽や古い民謡などの農耕文化が地域連帯の絆を深めており、「レジリエンス」（強靱性）の源になっている。「変わらないと残れない」と意識変化、哲学の進歩が見られる。

## 1 天孫降臨の地が世界農業遺産に

宮崎県高千穂郷・椎葉村は神楽かぐら息づく神話の里である。古来「天孫降臨」の地とされ、いまま農耕古神事が多数残っている。また、厳しい農作業の間に歌われてきた「刈干切唄」「ひえつき節」などの民謡も多く、独特の農林文化が息づいている。ここは民俗学の祖・柳田国男をして民俗学に目覚めさせた日本民俗学発祥の地でもある。5月中旬新緑の季節に、念願の秘境を訪問した。

高千穂郷は、山の中腹を用水路が走っている。ここは河川が深い渓谷にあるため、傾斜地に築かれた農地と河川に高度差があり水の確保が難しいので、明治期以降、水源を何キロも離れた山奥に求めて、水路と棚田の建設が進められた。山腹水路網500kmは大変な苦勞が察せられる。先人からの賜物だ。

この水路で、傾斜地にある棚田に水を供給し、稲作等が行なわれている。ほとんどの農家が、シイタケ、和牛（仔牛）、茶、棚田での稲作等を組み合わせた複合経営で暮らしを営んでいる。高千穂郷の三田井地区の一部は市街地を形成している。

「ひむか神話街道」を途中で外れ、山中のくねくね続く道に入り山奥へと進む。日本三大秘境の一つに数えられている（他は徳島祖谷、岐阜白川郷）。奥深く、祖谷や白川郷よりはるかに秘境の感がある。縄文時代から続く「焼畑」で、ソバやヒエ、アワなどを生産している。ここは平家落人伝説の舞台となる場所であり、ここも神楽が残されている。

山間地であり森林が多いが、諸塚村は針葉樹林と広葉樹林がパッチワーク状に配置され、農林業複合経営に見合った森林保全の景観が広がっている。日之影町は森林セラピーや棚田、五ヶ瀬町は「釜炒り茶」など、それぞれ特色はあるものの、全地域が農林業複合と古くからの農林文化が息づいている。

山と谷が続き、面積の93%が森林、耕地は3%、そのほとんどが傾斜地である。この厳しい条件の中、人々は農業と林業を複合的にこなうことで生活の糧を得ている。その営みが、希少動植物の保全、棚田の美しい景観、昔の日本神話と民俗を今に伝える神楽などの伝統文化を育んできた。この文化が最大の地域資源であり、地方創生につながっている。

古事記・日本書紀の中で語られている地域である。山間地で農林業複合経営で延々と続く持続可能な地域づくりが評価され、2015年、国連食糧農業機関（FAO）から「世界農業遺産」（GIAHS）



叶 芳和

1943年、鹿児島県奄美大島生まれ。一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了。元国民経済研究協会理事長。拓殖大学、帝京平成大学、日本経済大学院教授を歴任。主な著書は『農業・先進国型産業論』（日本経済新聞社1982年）、『赤い資本主義・中国』（東洋経済新報社1993年）、『走るアジア遅れる日本』（日本評論社2003年）、『新時代の農業挑戦』（全国農業会議所2014年）など。

表1：高千穂郷・椎葉村の人口推移

	高千穂町	日之影町	五ヶ瀬町	諸塚村	椎葉村
1960	27,052	15,711	9,321	8,048	10,879
1970	22,131	10,261	7,104	4,582	7,616
1980	19,957	8,013	6,034	3,470	5,478
1990	18,093	6,550	5,394	2,917	4,611
2000	15,843	5,445	5,079	2,402	3,769
2010	13,273	4,463	4,427	1,882	3,092
2020	11,642	3,635	3,472	1,486	2,503
2020/1960 増減率%	-57.0	-76.9	-62.8	-81.5	-77.0

出所：国勢調査。

に認定された。システム名は「高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム」。認定地域は高千穂郷（高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町、諸塚村）および椎葉村の3町2村である（昭和24年までの旧臼杵郡全域）。5町村人口は約2万3000人（2020国勢調査）。

高千穂町の甲斐宗之町長によると、GIAHS認定申請は、林野庁長官出身の松形祐堯知事の「フオレストピア構想（森林理想郷）」（1987年）に起源がある（県か

ら申請を促された）。山があり、山腹水路があり、棚田があり、シイタケ、和牛繁殖と続く。山の資源を活かした山間地農林複合経営という素晴らしいシステムである。甲斐氏「山の恵みから全てが始まる」。「レジリエンス」（強靱性）を感じさせる地域である。

**イノベーション**

高千穂郷は意外にも「豊かさ」を感じた。森林に囲まれ小さな耕地でありながら、農家収入は高収益の仔牛や山間地直接支払等の補助金で数百万円にはなる。すべて山腹水路と棚田が起点である。一方、椎葉村は焼畑の「生命力」の高さを感じた。人口減少は続いているが、サステナブルな地域づくりを感じた。

地域社会も変わってきた。神楽があるから若い人がUターンして過疎化を緩和しているが、その求心力になっていく神楽も、従来の女人禁止から女性も舞えるようになるなど、変わり始めた。高千穂郷も椎葉村も、変わることで残っている。イノベーションが持続的な地域づくりにつながっている。

イノベーション論の元祖ヨーゼフ・シュンペーターは、イノベ

ションが経済発展の原動力と考えた。シュンペーターのイノベーション概念は、工学的な技術革新に限らず、社会に新たな価値をもたらす「新機軸」を意味する広義である。「価値の創出方法の変革」である。

秘境と言われ、極度に条件不利



山腹水路（高千穂町三田井地区）。幅 1.15 ~ 1.5 m、傾斜 1/1000

高千穂は東京で思っていたより

## 2 山腹水路は「村の命」

しかし、周辺は断崖もあり、怖い。高千穂郷と椎葉地域は地形が違う。山と谷が連続と続くのは同じだが、高千穂郷は山と山の間に谷に阿蘇山の火砕流が流れ込み、台地を形成している。ここに農地を確保できる。これに対し、椎葉は阿蘇の火砕流がないので、山と深い谷からなり、空が狭い。高千穂は台地状の開けた空間があり、空が広い。

水土里ネット高千穂（高千穂土地改良区）理事長田崎耕平氏（67歳）の案内で、山腹水路を見に行つた（岩川水路）。水源（取水口）は、山腹にある棚田と溪谷状の河川の高度差が大きく、垂直に架かった梯子を100mも降りなければならぬ。怖くてカメラに収めることもできなかった。

な地域である高千穂郷・椎葉村は、社会の仕組みを変え、持続可能性を高めている。「変わらないと残れない」という意識、イノベーションへの取り組みこそ、高千穂郷・椎葉村の持続可能な地域づくりの秘訣だ。限界集落ならではの哲学の進歩だ。



この地域は、近世以前は農地の大部分は焼畑や畑で、コメも一部で陸稲の栽培が行なわれていた(湧水や地表水に恵まれた一部の土地では古くから棚田が拓かれていたがその面積は少なかった)。人々は食味が良く、安定して収量が高い水田での稲作を渴望し、水源を山奥に求め斜面に水路を構築し、棚田を建設した。水路は1600年代前半より造成が進められ、明治から大正にかけ造成は加速した。現在、総延長500kmの山腹用水路と1800haの棚田が形成されている。

山腹用水路の整備で、焼畑が棚田に代わり、人々は美味しいお米が食べられるようになった。棚田というと前近代的なもののように受け止めるが、山腹用水路と棚田は、明治時代の大きなイノベーションだったのである。

また、棚田の畔や法面は、その維持管理のため草刈りが行なわれるが、その雑草は畜産粗飼料となり、肉牛生産と深く結びついている。当地域農業の多角化、複合経営を可能にし、農家経営を安定させている。

山の急斜面に広がる棚田は美しい景観を生み出している。このラ

ンドスケープも、高千穂郷の誇りである。農水省の「日本棚田百選」124カ所のうち7カ所はここにある。

田崎さんの経営は、棚田130a、うち75aは稲作(品種ヒノヒカリ、反収450kg)、残り半分は飼料用米(WCS)。母牛8頭の繁殖経営。仔牛価格は高騰し、1頭77万円もするので、畜産だけで600万円に達する(筆者試算)。シイタケも栽培している(種駒1万5000)。

このほか、国から助成金がある。水田活用の直接支払交付金(10a当たり8万円)、産地交付金(転換作物拡大加算等、1・5万円)がある。自分のエサ用にWCSを栽培して8万円、牧草イタリアンで1・5万円、10a当たり9・5万円も助成金がある。粗収入100万円(推計)。

この地域は、シイタケ、牛、野菜、コメの複合経営であり、どの農家も一年中働いている。畜産が盛んであり、こんな辺鄙なところでありながら、農家収入は結構高い(平均500万円)。山間地でありながら、豊かな地域に見えた。

農家数は減少しているが、若い畜産農家が借地し、牧草を植えて

いる。直接支払制度はペナルティがあり、耕作放棄地が増えるとその集落は交付金が貰えなくなるという問題もある。田崎さんによると、「もし畑だと荒れているだろう。棚田、水田だから荒れない」。水路は年4回管理作業がある。草刈りが3回、泥上げ1回。農家である限り、勤めていても駆りだす。山腹用水路が複合経営を通して農家経済を安定させているが、逆に、

### 3

## 高千穂町秋元集落のレジリエンス

### 神楽が集落を守る

高千穂町向山地区の秋元集落の「農家民宿蔵森」(飯干金光氏経営)に泊まった(屋号は「ヤ」。不便な山奥である。しかし、泊まりは高級旅館の気分だった。古民家を内装改造した広々とした建物で、自家菜園で採れたての野菜や囲炉裏で焼くヤマメ料理で持てなされ、高級料亭にも優る雰囲気である。田舎の魅力を味わえるだけでなく、地域の歴史や風習、郷土芸能など面白い話を聞きながら、楽しく食事ができる。

標高500m、朝は雲海が眺められ素晴らしいと言われたが、あ

農業経営の継続が山腹用水路を守っている。

田崎理事長は「水路は村の命」と語る。山腹用水路は斜面を流れる雨水を受け止めて災害を防いでいる。集落の消火、消雪、生活用水にも利用されている。用水路の維持管理は村の大事だ。水利組合の使命を一生懸命に果たしている田崎さんは、地域住民から信頼され、尊敬されている。

いにく「卯の花腐し」で五月雨ける朝だった。

飯干金光さん(71歳)は、町役場を定年退職した後、農家民宿を始めた(2010年)。「山暮らしの体験をしていただきたい」という思いから始めたようだ。どうやら、「神楽さち」のようだ。夜を徹して舞い明かすという。皆、自分の所の神楽に誇りを持っているようだ。

高千穂町には、国指定重要無形民俗文化財「高千穂夜神楽」がある。神楽は年に一度、11月10日、集落ごとに実行される。現在、夜神楽が19集落で残っている(公民館数56、もともとはどの集落でも

神楽があった)。なお、現在、日神楽を含めると20数集落ある。

神楽するには最低20人必要。しかも、夜中ぶっ通しで(夕方5時から翌日昼まで)やるから体力がいるので、若い人が必要。秋元集落は住民80人いるので、何とかできる。

神楽が残っている集落は元氣と言われる。神楽は集落の元氣のバロメーターである。なお、向山地区には7集落(公民館)あるが、神楽が残っているのは秋元を含め3集落である。半分は消えた。

神楽は五穀豊穡を願って氏神様に奉納するもので、神々の舞を通じて地域は一体となる。氏神様を迎えて、民家で催される。希望者の家の持ち回りだ。自分の家で神楽してもらえるのは「光栄!」と考えている。

ただし、最近はずいや住居構造の制約から、公民館で行なうのが多く、民家でやるところは2集落だけである。接待役の女性の仕事が大変な負担ということもあるようだ。女性が強さを発揮し始めている。

神楽の伝統にも大きな変化が訪れている。神楽は、舞う人は男(女人禁止)、接待役は女性と決まっ

ているが、いまは舞う男(最低20人)が不足し、女性の参加が現れ始めた。村の話題は、継続か、昔からの伝統を守って消滅か。伝統を守るか(女性を入れてでも神楽を残していくか)、神楽がなくなっていくのかの論争だ。天照大神は、女神だったというのは革新派の主張。

町に近いところほど、「伝統」(女人禁止)を守り神楽は消えた。生活が便利という状況に甘えて「変えよう」としないからだ。

飯干さんは「集落を維持していくには氏神があつて、神楽があつて、この二つが必要」と考えている。秋元集落は、氏神様に守られているという意識の強い人が多い。だから、氏神様を大切にす

### 役場を辞め地域ビジネス

秋元集落は「飯干」姓が多い(9割は飯干姓、村の入口から順にイロハ屋号を付けて区別)。飯干淳志氏(67歳)は衰退していく故郷をみて(高齢化率60%以上の限界集落)、「地域ビジネスを創り、持続可能な村を作っていきたい」と考え、町役場を定年を待たず退職した(2010年、当時54歳)。「役場においては地域振興できない」と

思ったからである。

中山間地域で生産性、所得を上げるには、農業専業ではやれないと考え、「村まるごと博物館」エコミュージアム構想を考えた。神楽、神話、歴史、ジオパーク、ルーツ、自然環境など、地域の魅力を商品・サービスとして次代の田舎ビジネスを創り、田舎を若者が暮らせる社会にしたいと考えたのだ。「エコミュージアム」という考え方は、若い頃のスウェーデン旅行で初めて知った(当時35歳)。日本ではまだなかったコンセプトである。

農村コミュニティの現場活性化を考え、村おこしの人たちにも協力を求めたが、「やる気だけではだめ」ということに気づいた。人材の問題にぶつかったのである。

何よりも、人材を育てなければならぬと考えた。「株高千穂ムラたび」を設立し、どぶろく、甘酒、梅の出荷、ペットフードを始めた。農産品の付加価値が20倍、30倍と高くなった。いま、売上高1億円、従業員数15人規模に成長している。Uターンも、Iターンもいる。集落のジーンちゃんバーちゃんは、得意分野を生かして直売所(無人)と食堂(8人)を始めた。生活意欲の喚起に役立っている。

近年、秋元集落の人口減少率は緩くなってきた。2000年以降、5年間の減少率は18%、13%、18%と大きい。15・20年は12%減と緩和した。自分の故郷が世の中に知られていくに伴い、退職後は村に帰る人も出てきている。世界農業遺産認定の効果もあるのだろうか。

### GIAHSの効果は教育に

高千穂町の甲斐宗之町長にGIAHS認定の効果をお尋ねした。甲斐氏「経済効果は難しい。しかし、人材育成に生かせる。高千穂高校は地域を学んでいこうとクラブ活動が立ち上がっている。また、その高校生が雑誌や動画を作って、小・中学校に出向いて、地元地域の資源や暮らし、文化を教えている」。

「普通」と思っている暮らしが、外部から見ると素晴らしいことを地域の人に気づいてもらおうということだ。「中学生サミット」もある(年1回)。神楽や生物多様性についての発表会だ。

「当たり前がすごい」。GIAHSを契機に、若い世代にこの地域のすばらしさをしっかり伝えることになった。都会に出て行った若い

世代も、神楽の時期には帰ってくる。就職も、神楽のときには帰れるように九州地区に就職する人もいる。自分は必要とされていると思っっているようだ。

G I A H S 認定の地域振興に与える効果は、短期的には小さいようだ（経済効果）。しかし、若い世

## 4

### 椎葉村は生命力を感じる

#### 焼畑と生物多様性

椎葉村は日本三大秘境の一つである。山奥である。焼畑と平家落人伝説が有名だ。その山奥の山奥、村役場のある上椎葉から車でさらに50分、尾向地区向山にある民宿「焼畑」（椎葉勝氏経営、69歳）に泊まった。椎葉独特の型式、横に長い家屋だ（向山区は8割は椎葉姓。勝さんの屋号は「神輿」）。

焼畑は1950年頃までは全国各地で行なわれていたが、いまは全国でも唯一、当地だけである。椎葉村も各地で焼畑があったが、遅くまで残っていた尾向地区でも向山を除き90年頃にはなくなった。椎葉地域は神話はない。逆に「ひえつき節」（庭の山椒の木）など民謡の宝庫だ（猟師の多いところ

代の教育を通して、長期的には効果があると言えそうだ。

天孫降臨の神話や伝説、神楽などの伝統文化こそ、この地域の最大の地域資源であり、この文化の商品化をもっと積極的に考えてもいいように思えた。経済効果が期待できるのではないか。

は民謡が多い）。柳田国男は明治41年（1908）7月、椎葉村を訪れ、猪鹿の狩猟風俗などを調査し、翌年、民俗学関係では初めての書となる『後狩詩記』<sup>（のちのちのちのち）</sup>を著した。椎葉村は日本民俗学の発祥の地である。

椎葉は四方を山に囲まれ、ジビエとソバやヒエが主食、その大部分の作物は焼畑で作られた（1746年の記録によると、椎葉の耕地は田2反3畝、畑49町、焼畑429町だった）。

焼畑はソバ、ヒエ、アワ、アズキ、大豆を輪作した後、20〜30年の休閑期間を置いて森林に戻し、地力が回復したとき、再び焼畑を行なう循環的な農法である。また、多様な雑穀を組み合わせた輪作体系が特徴だ。

杉・ヒノキなどの植林地は常緑樹のため林地は暗く、下草や昆虫なども生育・生息にくい。一方、定期的に木を伐り、山に火を入れ、山の中に日当たりのよい畑地を作り出す焼畑は、植物が花を咲かせ、昆虫が活動、野鳥も飛来し、生態系が豊かな環境を作っている。焼畑は生きものを増やす。生物多様性の向上に一役買っている。また、灰が土壌を中和させるほか肥料にもなり、元気な作物を育てる。

焼畑の火入れは、体験参加のため、全国から多くの人が集まってくる。メディア、研究者、観光客だ。マレーシアなど海外からも来る。設定日（多くは8月3日）通りに実行されれば、100人くらい集まる。終わった後のビールが楽しみのような。しかし、山の天気は気まぐれ、過去23年間で設定日通りは4回だけ。焼畑は運だ。日程がズレると参加者は30名くらいに減る。設定日変更はビール飲み損ねたと文句がでる。勝さんは焼畑が近づくと、1週間前から胃が痛くなるそうだ。

尾向地区は、「焼畑蕎麦苦楽部」が結成されている（2008年結成）。民宿焼畑の勝さんが中心になって、焼畑を次世代に継承する目

的で、現在11名で構成されている（男5、女6）。クラブを「苦楽部」としたのは「山の仕事は重労働。しかし、一緒に集まって汗を流して作業することで苦しいことも楽しみや喜びに変わっていく」気持ちを表わしたのである。焼畑のときは、火入れやソバの種蒔きまで部員総出で行なう。

尾向小学校は1988年から、焼畑の体験学習を毎年行なっている（山は毎年、山持ちから借りる）。子供たち自身が火入れから収穫、脱穀、そして収穫したソバの実を石臼で挽き、ソバを打って地域の人たちと一緒に食べる。この徹底した体験学習は焼畑継承につながるのである。

民宿焼畑には、「焼畑新聞」（小4作品）が飾ってある。夏休みに日向市など各地から帰ってくる勝さんの孫たちが、夏休みの宿題として調べて作った新聞だ。

#### 3年輪作の循環的農法

椎葉勝さんに焼畑を案内してもらった。勝さんは山林を50ha所有している。昨年、60年生の杉を切って、0・5ha焼いた。そこには平家大根や平家カブの菜の花が咲いていた。

焼畑は前年12月から4月にかけて伐採し、葉や枝を枯らして、8月に焼く。午前中に焼き、当日午後、まだ地面が燻つているところにソバを蒔く。ソバは75日で収穫できるのので、8月に蒔き10月収穫になる。ソバの後、春まで畑を休ませ、5月にヒエ、アワを植える。

焼畑は1年目はソバ、2年目は稗ヒエと粟アワ、3年目は小豆と大豆を植える。順番が決まっている。3年輪作である。先代までは5年輪作だった。1年目ソバ、2年目ヒエ、3年目アズキ、4年目大豆だった。需要が少なくなったのでヒエ、アワ等は面積を半分に減らした。結果、3年輪作になった。順番は先代が考えた。

ソバがメインだ。勝さんは「ソバは雑穀ではない」と言う。ソバは「ミカド」（三角形）であり、エライ！ 雑穀と一緒にしてはいけないという。

山は毎年、焼く。3年輪作なので、畑は3カ所ある。ソバ、ヒエ、アワ、アズキ・大豆と3年輪作した後、畑は放置される。そして20年休ませた後、植林する（以前は30年後）。そして地力が回復した60年後、再び焼畑を行なう。ところで、樹種選びも焼畑に影響が出

るようだ。杉の後の焼畑より、広葉樹の後の焼畑の方が量が沢山とれ、また美味しいという。

## ヒエ(稗)のレジリエンス

もう一つの焼畑（5年経過）を見せてもらった。3年輪作を終え、雑草が茂っていたが、タラノ木がいつばい生えていた。タラノ木は面白い。杉林を伐採し火を入れると、翌春、すぐウドとタラの木が生えてくる。60年間地中に寝ていたのだ。何十年間も寝ていて、焼くの待っている。火の刺激で発芽する。そして、2、3年目から、「山菜の王様」タラの芽を沢山付け、5〜7・8年で枯れる（10年は持たない）。そして、また60年間眠りにつき、次の焼畑でまた芽を出す。その生命力と数奇ともいえる運命に興味を持った。

ヒエも、驚くべき生命力だ。小さな一粒で、何万倍にも増える。また、半世紀でも保存できる（アワは3〜4年、コメも同じ）。一束播種して、何万倍に増える。誠さん「これが椎葉のスゴイところだ」。ヒエは栄養価が高く、ビタミン類も豊富だ。ご飯に入れたり（もちもちご飯になり甘みもある）、ヒエ雑炊にする（イノシシの脂身と

骨付き肉を入れる）。ただ、食べられるように精白するのが大変。ヒエは3皮構造になっており、その皮を剥いて実を取り出すのが大変。手間が掛かるので、価格も1kg7500円と高い。

ヒエは10aで50kg収穫（穂べーす）できる。精白した実は3分の1になる。栽培は傾斜地でないとダメ（田んぼで栽培すると風味がない）。いま、焼畑は全国で勝さんだけであるが、ヒエも勝さん一人である。

「ひえつき節」歌は知っていても、ほとんどの人はヒエを食べたことない。筆者は今回、ヒエ入りご飯も、ヒエ雑炊もご馳走になった。幸いなるかな。民宿「焼畑」の料理は美味しかった。

タラの木もヒエも、その生命力に驚いた。縄文時代から続く焼畑、秘境にありながら続く椎葉集落の「レジリエンス」（注）も、ここに源があるのであろうか。

注：レジリエンス (resilience) は弾力、回復力、復元力、強靱性を意味する英語。困難な状況にもかかわらず、しなやかに適応して生き延びる力を言う。近年、生態系などへの関心が高まり、それとともにこの概念が流行っている。

る。筆者も、反対語のバルネラビリティ (vulnerability 脆弱性) は学生時代に覚えたが、レジリエンスという言葉に接したのは最近である。リスク適応能力、危機管理能力として注目されている概念だ。

## 移住と交流が村を支える

椎葉勝さんは若いころは長距離トラックのドライバーだった。椎葉村を出て全国色々などところに行けることを夢見た。23年前、父が倒れたので帰ってきた。民宿は勝さんが帰ってくる10年前から、父が始めた。当初は、大学の先生や焼畑体験に来て泊まる人たちだけであったが、許可を取ってやろうと民宿になった。

椎葉村の人口は、勝さんが村を出たとき（1984年）9000人だったが、23年前帰ってきたとき5500人、いま2400人に減っている（国勢調査とは異なる）。しかし、この尾向地区はそんなに減らないという。いま向山地区は77戸ある（昔は98戸あった）。空き家は2戸だけである。ここは減らない。

民宿「焼畑」の宿泊客数は年間約2000人。椎葉村全体では年間13万人（2019年）の観光客が



ある。道路事情の改善に加え、山奥が好きだという人が増えている。体験型の農家民泊も数年前から増え始め、現在4軒ある。交流人口が椎葉経済を支えている。

もう一つは、総務省の地域おこし協力隊だ。椎葉村は16年から受け入れ始め、現在までに合計19人が受け入れ16人が離任したが（3人はまだ任期中）、そのうち11人が任期を終えても帰らず、定住している。

椎葉村の第6次長期総合計画（22～31年度）では22～26年度の5年間に40人採用の計画であるが、仮にその6割が移住し定着すれば、また若者が24人増える。地域おこし協力隊が人口増加対策になっているようだ。興味深い戦略である。

### 焼畑地区は人口減が少ない

椎葉村の行政は「公民館」単位になっている。10の公民館に分かれ、さらに公民館の下に「組合」がある。民宿「焼畑」の勝さんは「尾向公民館」地区の向山区日添組合に属している（尾向公民館は尾前区と向山区から成る）。

公民館別に世帯数・人口の推移をみると、尾向地区の減少率は一

番小さい。最近20年間の世帯数は、椎葉全体20%減、役場や商店等がある上椎葉地区15%減に対し、尾向地区は10%減に留まっている。人口減少率も、椎葉全体34%減、上椎葉30%減に対し、尾向は17%減と相対的に小さい。（表2参照）。勝さんによると、尾向地区は若い人が多いという。Uイターン、それと役場退職者だ。なぜ、皆帰ってくるのか。伝統だという。隣

りの尾前区は商工集落、向山は百姓集落。向山は村の行事が賑やかで、村全体でやることに「はい、はい」と言って対応する。皆が前向きの生き方をしている。なお、向山では神楽の舞に女性も参加する。この20年間の人口減少の少なさは焼畑の効果が大きい。Uイターンが増えた。つまり、村全体で行なう活発な行事や焼畑体験など、「コト」消

費がUイターンの背景のようだ。焼畑があるから帰ってくるのではなく（焼畑は昔からあった）、村の祭り、行事、焼畑に参加した楽しい生活の思い出が帰郷の要因だ。椎葉村向山の「レジリエンス」の源はここにある。

ここは世界農業遺産認定された素晴らしい地域だと、子供たちに教えても大した効果はないのではないか。つまり、「見た、聞いた、知っている」は帰郷の決定力としては小さい。体験した日常生活が楽しかったかどうか。教えと実体験は違う。「いい思い出」がある人が帰る。

縄文時代から続き、原始的と思われがち「焼畑」地帯が、人口減少が一番少なく、元気である。焼畑農業のレジリエンス効果であるろうか。

「元気な老人」という概念がある。「寝たきり老人」の反対語だ。歳を取るのを避けられないが、元気な高齢者たれということだ。椎葉村尾向は、山奥という条件不利地帯であり過疎化傾向は避けられないであろうが、焼畑を続ける人たちによって、元気な地域（農村）として持続可能なのではないか。未来を期待できる地域である。

表2：椎葉村の公民館別世帯数・人口の推移

【世帯数】	大字 (公民館)	下福良		不土野		大河内	松尾	椎葉村計
		上椎葉	尾向	尾向	尾向			
	1980	703	439	264	186	309	312	1,588
	1990	634	399	232	163	273	312	1,451
	2000	576	386	220	161	248	275	1,319
	2010	531	369	206	153	219	247	1,203
	2020	466	327	190	145	193	208	1,057
	2000/1980 増減率%	-18.1	-12.1	-16.7	-13.4	-19.7	-11.9	-16.9
	2020/2000 増減率%	-19.1	-15.3	-13.6	-9.9	-22.2	-24.4	-19.9

【人口:人】	大字 (公民館)	下福良		不土野		大河内	松尾	椎葉村計
		上椎葉	尾向	尾向	尾向			
	1980	2,230	1,320	964	722	1,121	1,163	5,478
	1990	1,948	1,227	752	563	942	969	4,611
	2000	1,630	1,119	631	470	731	777	3,769
	2010	1,319	921	576	446	572	625	3,092
	2020	1,114	788	497	392	443	449	2,503
	2000/1980 増減率%	-26.9	-15.2	-34.5	-34.9	-34.8	-33.2	-38.5
	2020/2000 増減率%	-31.7	-29.6	-21.2	-16.6	-39.4	-42.2	-33.6

出所：椎葉村地域振興課調べ（原資料は国勢調査「小地域集計」）